

はまねこ

小川未明

青空文庫

そこは北きたのさびしい海岸かいがんでありました。秋あきも末すえになると、海うみが荒あれて、風かぜは、昼ひるとなく夜よるとなく吹ふいて、岩いわに打うちあたってくだけの波なみがほえていました。この時じぶん分ぶんになると、白しろいかもめがどこからともなく、たくさんこの海岸かいがんに集あつまってきました。そして、波なみの上うえをかすめたり、岩いわに下おりたりして、魚うおを捕とったのであります。

村むらの子供こどもたちは、砂山すなやまの上うえで遊あそんでいました。

「はまねこが、今日きょうは、たくさんいるなあ。」と、一人ひとりが、おどろいたように目めをみはって、沖おきの方ほうを見ていいました。このへんでは、白しろいかもめのことを、はまねこ、といっていたのです。

「沖^{おき}が、荒^あれるんだろう。」と、ほかの子供^{こども}が、いいました。

このとき、日^ひは、もう西^{にし}へはいりかけていました。遠^{とお}く、その方^{ほう}を見ると、雲^{くも}の切^きれめが、金^{きん}色^{いろ}に光^{ひか}つて、ものすごいうちに、くずれかけた悪魔^{あくま}のお城^{しろ}のような美^{うつく}しさがありませんでした。そして、その下^{した}に、おおかみのきばのような、とがった嶺^{みね}があり、もう、そこには、雪^{ゆき}がきていて、頭^{あたま}が白^{しろ}くなっていたのであります。

「弓^{ゆみ}をこしらえて、はまねこを射^いろうか？」

「はまねこなんか、とったって、たべられはしないや。」

「ううん、はまねこは、うまいというぜ。」

「はまねこをとると、よくないことがあるというから、だれもとらないのだよ。」

「うちのおじいさんがいった。はまねこを殺すと、海があれで、船が、難船するつて。」

「難船でない。漁がないというんだぜ。」

いつしか、子供たちは、こんなことをいつて争いました。そして、毎日のように見ているはまねこを、さも不思議そうにながめていたのであります。どうして、こんなことをいうのか？

この海岸の村に、つぎのような、昔、嘶が伝わっていたためです。

遠い、遠い、昔のこと、ある武士が、この浜でかもめを射ました。しかし、矢は、すこし外れて、片方の翼を傷つけたばかりです。傷ついたかもめは、くるくると落ち葉のように空をまわり

ながら、漁師りようしの家の庭いえさきに落ちました。ちょうど網あみの破れめを直なおしていた、人のいい漁師りようしは、鳥とりが落ちてきたので、すぐ飛とび出だしてみました。そして、だれか射いったのだということがわかれると、

「おお、命いのちにさわりのない傷きずだ。かわいそうだから、助たすけてやろう。」といって、その鳥とりを人の目ひとめにとまらぬところに隠かくしたのであります。そして、漁師りようしは、知らぬ顔かおで、また網あみを直なおしていました。

そこへ、弓ゆみを持もった、武士ぶしがはいってきました。

「このあたりへ、鳥とりが落おちなかつたか？ たしかに、ここへ落おちたと思おもうが……。」「と、武士ぶしがいました。

漁師りようしは、知れたらたいへんだと思いましたが、あわれな鳥とりを助たすけてやりたいばかりに、

「いいえ、ここへは、そんな鳥とりなど落おちてまいりません。鳥とりというものは、命いのちがありますと、落おちてから、どこへか地ちの上うへをはいますものですから。」と、まことしやかに、答こたえました。

「はて、おかしいことがあるものだな。」と、武士ぶしは、そのままいつてしまいました。

晩方ばんがたになって、もう、人ひとに捕とられる心しん配ぱいがなくなると、漁師りようしは、鳥とりを逃にがしてやったのであります。

この漁師りようしのおかみさんは、永ながらく病び氣ようきでねていました。それですから、家いえの中うちは貧まずしかったです。そして、これから寒さむく

なるのに、着る着物の仕度とてありませんでした。

ある日のこと、入り口に、一人の女が立ちました。

「私は、べつに頼るところのない身でございます。ただ機を織る

ことだけは、だれにも負けませんから、どうかしばらくの間、置

いてくださいませんか。」といつて、頼んだのであります。漁

師は、やさしい心の人であり、また、おかみさんもいい人であ

りましたから、

「じつは、女房が、機を織りかけてそのままになっているの

があるが、そんなら、それを織ってもらいましょう。」と漁師

夫婦は、女の頼みをききいれました。

女は、その日から、精を出して機を織りました。家じゅうのも

のが、着^きるだけの布^{ぬの}はじきに織^おつてしまいました。

「どうぞ、これから町^{まち}へ売^うるのを織^おらしてください。」と、女^{おんな}は
 いて、毎^{まい}日^{にち}、毎^{まい}晩^{ばん}、機^{はた}を織^おりました。そして、もう、冬^{ふゆ}と
 なつて漁^{りよう}のできなくなつた一家^かを助^{たす}けました。

ある日^ひのこと、女^{おんな}は織^{おり}物^{もの}を持^もつて、町^{まち}へ売^うりに出^でかけようと
 する漁^{りよう}師^しに向^むかつて、別^{べつ}に、一反^{たん}の織^{おり}物^{もの}を出^だして、

「この品^{しな}だけは、安^{やす}い値^ねで売^うりになつてはいけません。あなた
 のお望^{のぞ}みどおりの値^ねに売^うれる品^{しな}ですから。」といいました。

漁^{りよう}師^しは、それを持^もつてゆくと、はたして、いい値^ねで売^うれまし
 た。喜^{よろこ}んで家^{いえ}に帰^{かえ}つて、もう一反^{たん}同じものを織^おつてくれるように
 頼^{たの}んだのであります。

「あの布ぬのは、私の持わたしもつてきました糸いとで織おりましたのですが、もうあとにどれだけあるかわかりませんが、さあとにかく織おつてみましょう。」といって、女おんなは、家内かないの人たちひとが寢静ねしずまつてしまったまよなか真夜中まよなかごろ、独りひと起きて、チャン、チャンと機はたを織おっていました。漁師りようしは、なんだか、不思議ふしぎな気がして、ふすまのすきまから隣となりのへやをのぞきました。そして、びつくりしました。なぜなら、いつか逃にがしてやった、はまねこが、恩おんを返かえそうと、女おんなに化けてきて、自分じぶんの体からだの毛けをぬき、糸いとにまじえて、布ぬのを織おつていたからであります。

翌朝よくあさ起きると、すでに氣きづかれたと悟さとつたものか、機はたは、織おり残のこしのままになって、女おんなの姿すがたはどこへか消きえて見みえなかったの

でした。

それから、この村では、はまねこを捕るものがなかったのです……。

子供たちは、この昔、囃を、おじいさんや、おばあさんから聞いたことがなかったでしょう？ 子供たちが遊ぶ、砂山の下には、波が、岩に打ち寄せて砕けています。そして、雪のように白いかもめが、晩方の空にたくさん飛んでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年11月2日

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はまねこ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>